

製作を進めながら、「幼児教育から小学校教育へのつながり」をテーマに加藤先生からのお話を伺いました。

加藤先生の師である、小串里子先生の著書「みんなのアートワークショップ」を指導書として、メソッド化し、低学年の図工で実践されたところ、子どもたちが生き生きと造形活動に取り組み、自己肯定感が高まり全体的に生き生きとしてきたという変化が見られたそうです。



＜小串先生の言葉より＞ 幼児から低学年(2歳から7.8歳まで)の特徴

想像の年代：知識の発達とも相関関係の高い**形や色の概念が発達する**大切な時期である。

自分の意志で描き、様々な表現上の困難を一人で解決して乗り越えていくことのできる時期である。この時期に体を大きく動かした**粗大運動**を取り入れた造形活動や、**型にはまらない発想**を認めて、**自己表現**を援助することが必要である。

実践紹介にあたって、大切にしていること7つ

楽しいワクワク＞脳トレ、セラピー効果＞達成感、自己肯定感

▶体を大きく動かす粗大運動…特に幼児期、低学年

新聞紙をビリビリ破く、ギュッとさせる、数個包む

▶枠から飛び出す表現にする…中から外へ、だんだん大きく／成長するイメージ

新聞を丸めて大きくしていく

▶自分で決めたり、選択する楽しさを多くする…様々な素材に触れる

▶技能は、トレーニングにならないように体験が大事…技能はどのように教える？支援する？

大人が描いた線子どもにはさみで切らせる？

▶軟質の画材や材料はセラピー効果…軟質・硬質の画材の意識

やわらかい材料の新聞をギュッと丸めたり、和紙を優しく重ねて貼ったりする

やわらかい…粘土、筆(描画材) 硬い…木材、色鉛筆やクーピー(描画材)

▶自己肯定感、達成感…支援者も感動し伝える・愛され、認めてもらっている安心感

上手い下手にとらわれない、幅広い許容範囲が支援者にも必要

作るものを自由にするのは、何を作っても良いという信頼感の表れでもあること

